

展覧会情報

第3回 空襲の記録—全国主要都市戦災概況図—

会場 国立公文書館
電話 03-3214-0621
期間 8月12日～9月20日

富士山世界文化遺産登録記念特別展 「鳥の目で見た富士～鳥瞰図の世界～」

会場 富士市立博物館
電話 0545-21-3380
期間 6月25日～9月29日

特別展「たかおか町絵図探訪！」

会場 高岡市立博物館
電話 0766-20-1572
期間 7月27日～10月14日

佐竹家所蔵—古地図展

会場 千秋文庫
電話 03-3261-0075
期間 9月10日～12月7日

G空間EXPO2013

会場 日本科学未来館
期間 11月14日～16日

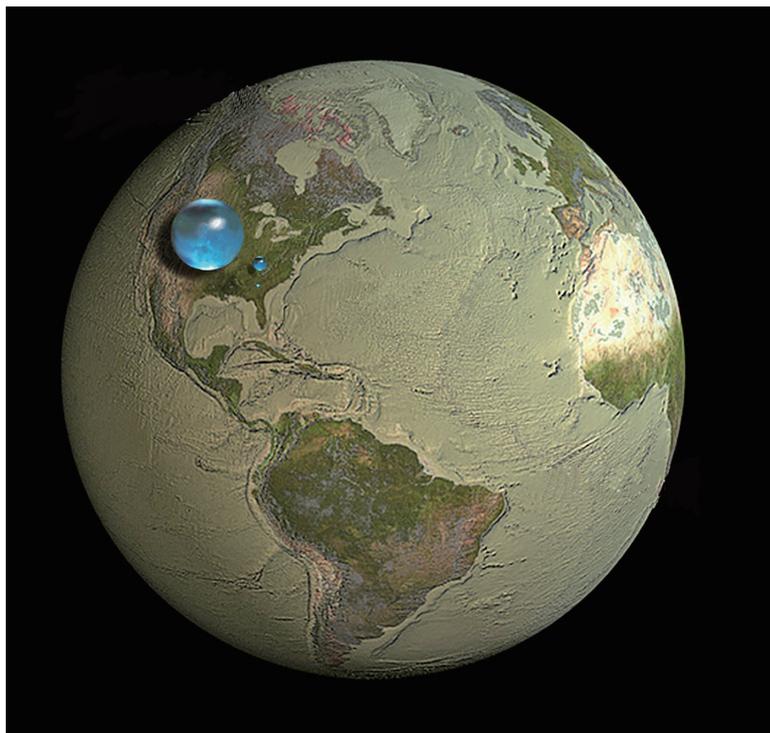
巡検・セミナー開催のご案内

平成25年第1回セミナーのご案内

日時：平成25年11月23日（土・祝、10時頃）
場所：川越市内を予定
講師：辻野民雄氏（カルトグラフィックアナリスト・地図学の研究室）
演題：「日本の民間地図の変遷（仮称）」

実際に地図を作成していた経験に基づく貴重なセミナーです。会場は未定ですが、川越市立博物館などを予定しております。セミナー後“川越市内ミニ巡検”も検討中。現在、辻野氏とテキストなどの調整を行っておりますのでご期待下さい。参加ご希望の方は当センターまでお電話、FAX、E-mailで。開催会場、開催時間などの詳細は11月1日発行予定の次号ICICニュースをご覧ください。

mini地図NEWS



地球の水を集めると…

地表の7割が海といわれる地球ですが、実はかなり薄皮でした。アメリカ地質調査所（United States Geological Survey; USGS）によると、地球上に存在する海、河川、地下水、はたまた空気中の水分から僕らの生物のからだに至るまで、水と呼ばれるものをあつめても直径860マイル（約1,385km）「の球体にしかならないそうです

さらに、地下水、沼、湖、河川の水に限定すると169.5マイル（約270km）、左の画像で2番目の大きさの球体にしかならず、さらに私たちの手が届きやすい湖、河川では3番目のほとんど見えない34.9マイル（約56km）の球体になります。印刷で見えるでしょうか？

でも、川の水が淡水の中で占める割合はなんとたったの0.006%。すべての水のうち、96.5%は海水です。残りの3.5%ですら7割は北極南極の氷河や氷冠などに閉じ込められているとのこと。（DON JAPAN、参照先はThe USGS Water Science School）

地図 絡み

第54回 三佛寺投入堂への修行山道

帝京大学理事 井口悦男

もう4半世紀過ぎてしまったが、次男の20世紀好きを産地でかなえようと(当時の青梨代表)、夏休みの終わりに、家族旅行をはじめて鳥取に向かった。県の東半、因幡国を中心に、鳥取砂丘、浦富(網代)海岸、岩井温泉などに加え、隣国伯耆の東端、中国山地日本海斜面、1km近くの「三徳山」(因幡国境)中腹500mに露出した岩壁上段寄り岩棚に、キッチリはめ込まれたかのように、壁面に合わせた蔵王権現を祀る(現在麓の本堂に安置)、数少ない地方所在平安期、通称「投入堂」にもお参りすることとした。

広く流布したこの堂の写真は、麓の「三佛寺」から到達山道終点地「投入堂」を、一番近く見上げる、急傾斜大岩壁下からの姿で、堂を支えるのに、岩棚内で済ませず、長い1本の角材を幾つか伸ばし、滑る岩肌の壁面にある僅かの小窪地に土台を置き、二重に堂を支え見事である。

お堂の様式は、寝殿造に近い住宅様式で、寺院ながら、神社に近く簡素単純そのもので、組物も軽やかで清々しい。その希なすばらしさを、修験者の修行山道をたどり、汗をかき堂下に近づき、写真以上の角度あるいは近くに達し、拝することができることも期待した。

麓の本堂で、登山修行を志す、にわか修験者となり、首掛け襟幅白布をいただき、さっそく山上をめざした。この道は「三徳山」頂から北に向かいやや深く削られた深い木々が茂る谷筋西尾根筋に、踏跡の土道と目印のゴロゴロ岩の続く所を、グイグイ上る急傾斜をゆく細筋である。



投入堂 (Wikipedia)

この尾根筋をはい上る前に、麓の日常世界と区切るかのような、垂直20mに達する、木の根だけが足掛りの、見えるのは目の前に広がる大きな土の壁という踏跡のない崖が立ちはだかる。

一所懸命よじ登り、「三徳山」上の青空が頭上に見える急坂をあえぐと、やがて尾根線の木々の間に、チョコ

投入堂が描入された2.5万分1「三朝」3色刷、松江4-2は、昭和48(1975)年測を初版(図1)とする。再版図(昭和57年修正)を含め、投入堂手前の仏宇記号(鐘楼)を欠き、かつ麓の本堂から投入堂への道は描かれない。寺境内の私道のためか。

昭和62('85)年修正(第3版、図2)に至り、大まかな小径が、図に登場する。さらに、平成5('93)年修正(第4版、図3)で、ようやく現状に添う道筋に改められた。なお、公道ではないが、参詣道として利用度を考え、例外的描入をはかったと。

と乗ったような四角の濡縁に囲まれた、四注造りのお堂が上下に2つ見えだす。四方の谷間を見下ろせ、一息入れるに絶好の所で、はい上った目線が思い切り解放される。ただし、木々より抜け出し、雨ざらしの建物のせいで、四周の濡れ縁の極厚板でも所々穴があき、欄干施設もなく、見下ろす絶景も、転落の恐怖と共存する。これも修行のひとつと納得。

少々あえぐと、ようやく平坦尾根に入り、大きな岩々の重なり合う赤松茂る中に、「鐘楼」が現われる。1つきしたくなる。

岩々の間を進むと、暫くして一枚岩の急傾面上部に「投入堂」が写真と同じ視点で目に入る。残念ながら、この先には歩めない。

この山の麓を東西に、快適なハイウェイが通る。途中、木々の途切れから、はるか上に投入堂の岩壁全体が見通せる所があり、投入堂が小さく見え、荘厳さを岩壁がただよわす。

苦勞して近くで拝しても、自動車道から遠く小さく一見しても、変わりなかった。修行不足の故か。(H25.7.22)



図1 2万5千分1「三朝」初版、昭和48年測、原寸、以下同



図2 「三朝」第3版、昭和62年修正



図3 「三朝」第4版、平成5年修正